

ねん がつ にち
2024年7月21日

ねんかんだい しゅじつ
年間第16主日

きくち いさおだい しきょう
菊地 功大司教 メッセージ

マルコ福音は、先週^{ふくいん}の続き^{せんしゅう つづ}で、福音宣教^{ふくいんせんきょう}に派遣^{はけん}された弟子^{でし}たちが共同体^{きょうどうたい}に戻^{もど}り、宣教活動^{せんきょうかっどう}における成果^{せい}を報告^{ほうこく}すると、イエスは観想^{かんそう}の祈り^{いの}のうちに振り返^ふるよう^{かえ}に招かれ^{まね}たと記^{しる}します。

シノドス第一会期^{だいいちかい}の最終^{さいしゅう}文書^{ぶんしょ}は、信仰養成^{しんこうようせい}について触^ふれた箇所^{かしょ}で、次のよう^{つぎ}に記^{しる}しています。

「イエスが弟子^{でし}たちを養成^{ようせい}した仕方^{しかた}は、わたしたちが従^{したが}うべき模範^{もはん}です。イエスは単^{たん}に教^{おし}えを授^{さず}けるだけでなく、弟子^{でし}たちと生活^{せいかつ}をともにしました。自^{みづか}らの祈^{いの}りによって、「祈^{いの}ることを教^{おし}えてください」という問^といを彼^{かれ}らから引^ひき出^だし、群衆^{ぐんしゅう}に食^{しょく}事^じを与^{あた}えることによ^よって、困^{こま}っている人^{ひと}を見捨^みてないことを教^{おし}え、エルサレム^{あゆ}へ歩^{あゆ}むことによ^よって、十^じ字^か架^かへの道^{みち}を示^{しめ}しました (14b)」

今日^{きょう}の福音^{ふくいん}では、実際^{じっさい}に宣教^{せんきょう}に出^でかけて戻^{もど}ってきた弟子^{でし}たちに、「しばらく休^{やす}むが良^よい」と休息^{きゅうそく}をとることを勧^{すす}めた話^{はなし}になっていますが、これ^たは単^{たん}に身^{しん}体^{たい}的^{てき}な休^{きゅう}息^{そく}だけではな^なく霊^{れい}的^{てき}な休^{きゅう}息^{そく}、すなわち観^{かん}想^{そう}と祈^{いの}りにおける振^ふり返^{がえ}りの必要^{ひつよう}性^{せい}を弟子^{でし}たちに教^{おし}えた話^{はなし}です。

イエスご自身^{じしん}も、人々^{ひとびと}の間^{あいだ}での様^{さま}々^{ざま}な教^{おし}えや具^ぐ体^{たい}的^{てき}な行^{こう}動^{どう}の前^{まえ}、朝^{あさ}早^{はや}くまだ暗^{くら}いうちに、人里^{ひとざと}離^{はな}れた所^{ところ}に出^いて行^いかれ、一^{ひとり}人^いで祈^{いの}られたこと^たが他^かの箇^か所^{しょ}に記^{しる}されています。ご自分^{じぶん}の使^し命^{めい}をはたす力^{ちから}を、観^{かん}想^{そう}の祈^{いの}りから得^えておられた主^{しゅ}イエスは、ま^まさしくやっ^やつてみ^みせること^こで、弟子^{でし}たちにその重^{じゅう}要^{よう}性^{せい}を示^{しめ}しました。

シノドス第一会期^{だいいちかい}の最終^{さいしゅう}文書^{ぶんしょ}は、シノドス的^{てき}な教^{きょう}会^{かい}共^{きょう}同^{かい}体^{たい}であるた^ために必要^{ひつよう}な要^{よう}素^そを記^{しる}している箇^か所^{しょ}に、次のよう^{つぎ}に記^{しる}しています。

「イエス・キリストを人生の中心に据えるには、ある程度、自己を空にすることが必要
です。・・・各人が自分の限界と自分の視点の偏りを認識することを強いる、厳しい禁
欲的な実践です。このため、教会共同体の境界を越えて語りかける神の霊の声に耳を
傾ける可能性が開かれ、変化と回心の旅を始めることができます (16c)」

シノドス的な教会を求める旅路には、例えば霊における会話のように重要な道具が用意
されています。霊における会話が強調されることで、それをその通りに行うこと自体
が重要視されてしまうきらいがありますが、あくまでもそれは重要ではあるけれど道具
の一つに過ぎません。霊における会話のプロセスの中で大切なことは、やはり沈黙と祈
りです。もちろん参加者がそれぞれの思いを語ることと耳を傾けることは重要ですが、
それ以上に、沈黙のうちに共に祈ることが欠いていては、霊における会話は成り立ちま
せん。沈黙の祈りは考え込むときではなく、「自己を空にする」時であります。「自分の限界
と自分の視点の偏りを認識する」時でもあります。

わたしたち教会の福音宣教の活動は、必ずや沈黙のうちの振り返りの祈りの時に支え
られていなくてはなりません。